

## 水川の林業

～現場の声に耳を傾けて～

林田祐輝

はじめに

- 1 日本の林業の近現代史
- 2 水川の林業の昔
  - 2.1 江戸時代
  - 2.2 川狩り問題
  - 2.3 明治時代
  - 2.4 大正時代
  - 2.5 昭和～平成初期まで
- 3 水川の林業 ～現場からの声～
  - 3.1 生業としての林業1
  - 3.2 生業としての林業2
  - 3.3 林業と深く関わる職業から
  - 3.4 森林組合おおいがわ中川根支所

おわりに

参考文献・参考 HP

はじめに

日本の昔話によく「おじいさんは柴刈りに、おばあさんは川に洗濯に…」という一節が出てくる。ここで出てくる柴刈りとは山林に生える草木を刈り取る作業のことであり、林業で行われる下草刈りのことを指している。今回林業について調査した川根本町の水川は山間地域であるため、かつては生活と山林が密接に関わっていた。水川での山林を活かした生活の中に生業のひとつとして溶け込んでいた林業ではあるが、今日本の林業は活気を失っていると一般的に言われている。このレポートの目的は、文献などから見えてくる元気の無い日本の林業が、静岡県山村である川根本町水川地区ではどうなっているのか、地元の林業に携わっている人々のインタビューをもとに見ていこうとするものである。

### 1 日本の林業の近現代史

日本人は生活で使う物質文化全般の素材に木材を多用する文化を育んできた。それは人々の身近に森林があり、木材が豊富だったからである。全国の山林で現在のような林業が始まったのは明治時代に入ってからだが、江戸時代にも大名や幕府の下で木を伐り出し

納品する御用材などの林業活動は存在した。当然ながら当時は現代のチェーンソーやトラックなどといった便利な機械が無かったので、作業全てが人力や馬力であり、斜面の傾斜や川の流れなどを上手く利用して出材していた。一般民衆の生活の中には、共同使用の里山があり、木材だけでなく薪・木炭・落ち葉・木の実・シイタケ・動物の狩り場になるなど生活に密着していた。明治時代を過ぎてからの林業のようすについては、次節の「水川の林業」に詳しいのでここでは詳細を省くが、時代の波に揉まれながらその姿を変化させつつ第二次世界大戦を迎えた。林業にとって第二次世界大戦の前と後は歴史の大きな区切りとなっている。大量の木材を戦時体制の中で消費した結果、戦後の日本では国の指導の下全国の山地でスギ・ヒノキを人工植林する大きな流れが生まれた。戦後しばらくは国内での木材消費が順調で、外国産の木材が市場に進出するまでは、林業家にとって安泰な時代が続いた。外国産の木材、略して外材が日本の木材市場に参戦し、存在感を示し始めたのは 1960 年代からである。当初は熱帯産で材質の軟らかすぎるラワンを輸入していたが、そののち輸入量が増えた北米やロシアなどの木材は、価格の安さと品質の良さを武器に国内産材を市場の隅に押しやっていくことになるのである。戦後の大量植林と外材の輸入自由化が、結果として現在の林業の停滞を招くことになったのであった。

現在、日本の国土はその 6 割強が山林で覆われており、さらにそのうちの 4 割が人工的に植林された民有林、6 割弱が天然林である(農林水産省 2005)。そして、その民有林が管理不届き状態の放置林になったり、管理はされているが木を伐採できずにいるため飾り物になったりしている。日本の森林に手が入らなくなったのは何故なのか。それは木材の価格が安く採算が合わないのと、間伐や下刈りにかかる費用が負担できないからであり、そのため林業家の森林に対しての関心が低くなったことが大きいと言える。そもそも民有の人工林は将来的に木材として出材することを当初の目的に掲げた上で造成されたものなので、木材価格が安くなれば林業家の関心が低くなってしまふのは当然の成り行きだと言える。日本には国内消費に耐えうるのに十分な森林の蓄積がある。国産材を有効に利用することが、林業の現状を打破することにつながる。他の問題としては森林の所有者が遠く離れた場所に住んでいて林に目が行き届かないケースや、所有者の世代交代が進み林業に対しての意識が低下するケースが今後さらに増えていくことだろう。

森林は木材の生産の場であるだけでなく、土壌保全や水源涵養機能を初めとした公益機能によって国土を保全する役割も果たしている。森林の多面的な機能を理解し、利用と保全を両立させることを考える時期である(農林水産省 2005)。

## 2 水川の林業の昔

この節では、主に中川根町史(中川根町史編さん委員会編 2006)に依拠して、水川を含む中川根の林業の歴史を記述する。

## 2.1 江戸時代

川根の土地は明石山系に属し、深く山間にあり森林が豊かであったため、江戸時代のころは御用材の切り出しなどで木材を出材していた。そのころは御用材とは城郭や架橋、神社や仏閣などの建築に使うために各地の山間地帯から切り出される木材のことである。

そのころの林業には、近代以降に開発されたような機械系の道具などは無かったため、作業は人力で動かすような道具に頼っていた。木を切る際には大振りの鋸を使い、伐採した後は、林道を設けることが出来る場所では木馬きんまとよばれる木製の大きなそりを使用した。木馬に積み上げた木材は、縄で縛るのではなくかすがいを打ち込むことによって固定した。これを綱でつないで人夫が引っ張り、山を下りたところにある大井川の支流まで運んだという。山の中には急な斜面も多いので、そういう場所で重い木馬を扱う人夫が怪我をすることもあったという。

伐採した土地があまりの急斜面で、林道を作って木馬を使用することが出来ない場合は修羅しゅらと呼ばれる簡易の運搬道のようなものをこしらえた。これは斜面の窪んでいる部分を利用して伐った木材をハーフパイプのように並べ、その上を、滑り台の要領で他の木材を滑らせて下ろし、下ろした分の木材を同じように並べまた上から滑らせて下ろすというスライド式の作業を繰り返すものである。これもまた谷の支流まで運んだ。

川の支流まで運ばれた木材は水流を利用して大井川の本流へ運ばれ、またそこから遠く下流の島田しまだの向谷まで流され運ばれた。



写真1 木馬



写真2 策動と人々

## 2.2 川狩り問題

大井川での木材の流送のことを「川狩り」と呼ぶ。川狩りは1年のなかで林業が活発になる10月から3月までの期間に行われた。川根において、木材を下流域まで輸送する手段は大井川による水運に始まり、川に沿ってワイヤーが張り巡らされてからは策動さくどうというロープウェイのような機械による運搬、そして大井川鉄道が開通してからは鉄道輸送へと変遷してきた。川狩りは最も古い輸送方法であり、昭和初期頃まで行われていたという。大井川上流に広大な山林を所有していた東海パルプの前身などが大規模な伐採を行い、一度

に大量の木材を流すことがあった。伐採されたスギ・ヒノキは筏に組まれて人夫の操作で流されたこともあったが、ほとんどの場合は「バラ流し」「管流し」と呼ばれる一斉放流する方式で流された。これらを総称して川狩りという。大規模な川狩りの時に流される木材の数は相当なもので、数千本、数万本という単位で川を材木が流れていく光景が見られた。このような場合、川狩りはいくつかの問題を流域にもたらした。それは川狩り問題と呼ばれた。

当時の大井川流域における物資輸送の要は、言うまでもなく水流を利用した船によるものであった。船は船頭を配し下りは水流に乗って下り、上りは流れに逆らって進むので2~3人の人夫に綱で引かせたり、帆を張って風の力を借りたりしていたのだが、これが上流から流れてきた大量の木材とかち合った時に船と衝突して難破するという事故が起こった。川狩りの被害は船だけでなく、時に川の途中にある橋や堤防などを破壊することもあったため、大きな問題となった。川狩りをする木材業者と船を渡す通船業者の間には通船運航の優先や川狩りをする区間や期限などの「川狩取締規則」があり、木材業者は従うように努力していたが両者間の妥協が成立しないと激しく衝突することもあった。

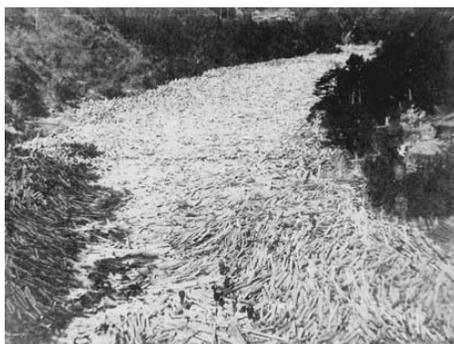


写真3 川狩りの風景

### 2.3 明治時代

本格的な林業地としての川根の山林の開発は明治時代から活発になった。明治の初期頃までは木材の需要が少なく、現在と同じようにスギ・ヒノキなどの木材価格も低かったのであまり林業は盛んではなかった。川根で林業が盛んになったのは明治6(1873)年を過ぎたあたりからで、この頃から木材の販路が整い需要も広がりだしたようである。近畿地方など、他の地域から近代的な植林林業家を招き、植林方法を学び人工林の効率的な造成方法などを教わった。谷間の窪地や川沢に近いところなど、比較的水気が多い場所にはスギを植え、斜面の上方で比較的水はけのよい場所にはヒノキを植えた。場所によってスギ・ヒノキを混ぜて植えた。スギ・ヒノキに適さない場所は雑木林とし、薪を拾ったりシイタケの栽培をしたり木炭を焼いたり、日々の生活に役立てた。このようにして少しずつ現在のような様式の林業に近づいていった。

中川根村では、明治 21(1888)年に村の各大字で所有していた山林を各戸に分割して与えるという土地整理が行われた<sup>3</sup>。これにより山持ちとなった人々が競って植林を行うようになり山林も整備されていったという。

明治時代の後半は木材の価格が高騰し、林業が投資対象として大きく注目されるようになっていた。地域の学校も財産造成を目的に植林した。日露戦争を記念して植林が行われた。民間企業が植林事業に資金を投入する計画が多く持ち上がり、地域の青年団などの住民団体でも積極的に林業に携わろうとしたため、この時代は林業にとっても活気があったようだ。中川根村に山林組合が組織されたのは明治 29(1896)年で、静岡県が制定した「民有山林組合規則」にしたがって設立された。

この明治時代の林業の発展は土地区画整理による土地所有者の増加と、それに伴う植林に対する意欲の向上や、下流域の島田における製材業の発達、木材商人たちの活動によって起きたものである。製材業者の発展について言うと、明治 19(1886)年大井川流域の木材業者が大井川沿岸木材商組合を設立し、明治 36(1903)年には大井川木材商同業組合へとなった。ここでは木材の製品としての規格を統一したりした。製材業者にとって一大転換期だったのが東海道線の開通で、これにより流通が大きく変化し、木工業にも新しい流れが生まれた。そのためか、木材の一大集積地であった島田町を中心に製材業者や製函業者が発展して「木都島田」と呼ばれるまでになっていった。製材業の工場数は明治 43(1910)年までに 300 を超え、また明治 40(1907)年には東海パルプの前身である東海紙料株式会社が設立され、島田に工場が建設された。

## 2.4 大正時代

大正時代、静岡県は県全体において補助金を出したり林業の専門家を招いたりするなどして林業にてこ入れを図っていた。スギ・ヒノキ・マツなどの針葉樹で人工植林をし、雑木もモミ・ケヤキ・ツガなどを伐りっぱなしにせず計画的に植栽する方法が模索された。昭和 2(1927)年には森林組合などの活動に補助金を交付することになり、これ以降県内に森林組合が増加していった。

この時代の山林業は、本来中川根でも盛んであった茶業の生産高が下がってきたのと反比例して少しずつその割合を伸ばしていった。これは大正時代に入ってから林業発達の結果であり、具体的には農産物の生産高で、茶業の割合が 40 パーセントを切ったのに対して木材・木炭などの林産物は大きく増加し 50 パーセント近くを占めるようになったという。そこからみえるのは、中川根の農林業が以前より多様性を持ち始めたということである。茶葉の生産や穀物栽培だけではなく、その豊かな山林を活かした林業と、それに付随するシイタケ栽培や木炭生産なども発展し、経済活動が拡大したと言える。これらの産業の弱点としては、一様に市場価格が変わりやすい商品ばかりであるという点で、経済的な安定性に欠けるものであった。この価格の不安定さが、今日でも林業にとっての大きなネック

<sup>3</sup> 同じような土地整理は大正年間にも行われている。詳しくは兼岡 2009 参照

となっている。

大正 3(1914)年に起きた第一次世界大戦では軍需としての木材の需要が大幅に伸び、相対的に国内で普通に消費する木材が不足したため木材価格が上昇し、大正期の後半にピークを迎えるまで高値で取引されていた。しかし、戦後の金融恐慌と関東大震災の復興で大量に輸入した樺太などの外国産木材の影響で、木材価格は下降曲線を描き始める。この流れは昭和の経済不況と林業の低迷に受け継がれていく。

## 2.5 昭和～平成初期まで

昭和初期の林業は、大正後期に起きた第一次世界大戦後の恐慌の流れを引き継いだ国内経済の低迷の中で衰退していった。中川根町も不景気の波に飲み込まれ、木材だけでなくお茶の葉の値段が最盛期の半分までに下落するなど大変な時代を迎えることになる。

中川根における主要輸送手段といえば大井川での船搬であったのが、大正 15(1926)年に始まった大井川鉄道の敷設工事が実を結んだ結果、昭和 6(1931)年より鉄道での物資輸送が可能になった。これにより木材の確実な運搬が可能になった。ただし開通してしばらくの頃は運賃が高かったので実際に木材運搬に使うようになったのはもう少し後になってからである。

戦後の水川では、戦時中に伐りすぎた森林の林業生産力と水源涵養機能などの回復を狙い、緑化運動の推進が図られた。川根全体では、昭和 30 年代に入ってから大井川流域に電力開発を伴うダム開発が始まったため、木材の流送が困難になるという問題を抱えるようになった。大井川の利用が細っていく状況は昭和初期から始まっていたが、山林所有者と木材業者はここに来て木材価格の低下と陸上輸送による輸送費用の高騰のダブルパンチを受けることになった。

高度経済成長期には木材の需要が高まった。この時期に中川根町は生産力増強のために林業構造改善事業を行っている。この事業では世の中の好景気に乗ることと、隣の天竜川流域の林業に少しでも追いつくことを目標としていた。この事業により、水川の隣の徳山地区に県営の育種畑や町営林業センターが建設され、チェーンソー・集材機・輸送車の導入、林道の敷設などが実現化された。この時期の中川根町は個人所有の人工林が多くを占め、人工林の 80 パーセントがスギで、ヒノキが 17 パーセント、マツが 0.7 パーセントであった。この頃の川根の林業は、まだ明るい。日本全国及び川根の林業にとって暗い時代がやってきたのは昭和 49(1974)年のオイルショック以降である。木材市場はその 80 パーセントを外国産木材が占め、労働賃金の上昇、林業に携わる者の高齢化、木材価格の暴落などが絡み水川の林業は厳しい状況にさらされるようになっていくことになるのであった。

## 3 水川の林業 ～現場からの声～

この節では、現在林業に関わっている方々の目から見た水川の林業を語っていただく。

### 3.1 生業としての林業 1

Tさん(80歳代 男性)は、かつては林業と茶業を兼業し、現在は林業は適度に木を管理している程度というお茶農家の方である。Tさんは自分が見聞きしてきた水川の林業について以下のように語った。

川根地域では、明治時代の頃から徐々に一般農家の間にも林業が広まった。林業は、すでに主要産業であった茶業と組み合わせて兼業する形で行われる場合が多かった。お茶と木材は、市場における価格が時流の変化などによって変動しやすいため、お茶の値段が下がった時代には林業が、木材の値段が下がった時代には茶業が盛んになって農家の人々の生計を支えていた。そのため農家の収入源は常にお茶と木材が半々だったわけではなく、時代によってはほとんど木材を売らなかつたり、お茶が低迷した時期は林業とその副産物などに重点を置いたりするなど、柔軟に変化していった。茶業と林業は、農家の1年間の生活のなかで季節を節目にして、一定のサイクルを保ち仕事が行なわれていた。その生業サイクルとは、春から夏にかけては専ら茶畑に出て茶業に精を出し、秋から冬にかけては、それまで茶業に掛かっていた手間を掛けられなかった分、山で木の手入れをし、時には伐採して出材するなど林業に時間を割くというものである。春夏にお茶を売り生活資金を手に入れ、年末が近づくとつれて懐具合が「今年はお茶の収入だけでは少ないかもしれない」方向に傾いてくると、自分の管理している山からスギやヒノキを切り出し出材して収入の足しにするといったこともされていたようだ。当時の林業地は現在のようにスギ・ヒノキのみで構成されていたわけではない。かつては山に雑木林があり、そこでは木材生産だけではなく、木の実を採ったり薪を拾ったり、雑木の枝を利用してシイタケを栽培したりしていた。また木の種類によっては木材としても扱った。雑木林に生えている木の種類は、クヌギ・コナラ・ブナ・サルスベリ・モミ・マツなどで、名前の通り雑多に生えていた。雑木林は、生活燃料などを提供するだけでなく、木の多くが落葉樹であることから、季節の変化に合わせて葉の色など木々の表情が変わり、山の景観に彩りを添えるという何気ない、しかし重要な役割も果たしていた。山では単に木材生産の場としてだけではなく、雑木林の木を利用したシイタケなどの栽培をする場としても利用することができ、それらは自家用に育てたり、市場に出荷して多少の収入を得たりすることもできた。市場に出荷する場合は、シイタケもお茶や木材と同様に価格がその時々で変動したため、栽培が流行ったり、まったく作られなかつたりと時代ごとに状況が大きく変わった。シイタケは他の作物同様食害を受けやすく、特にシカ・リス・サルなどに食べられたという。食害が出た場合、網を張ったり、爆発音で動物を脅かす機械を使ったりしたが、網はともかく爆音機の音は動物が慣れてしまえば効果がなくなった。シイタケに限らずいつ頃からか水川の農作物にも食害が発生するようになったが、この原因のひとつに林業地にスギとヒノキばかり植えて雑木が少なくなり動物のえさが減ったことが考えられる。シイタケは林業をやっていた人の全員が栽培していたわけではなく、人それぞれであったようだが、現在ではシイタケの値段が恒常的に下がっているの、水川では全体的にシイタケ栽培は流行らないよ

うである。

このように林業とその副産物は農家の生活の一部として定着していたのだが、昭和の戦後になってからは、国が主導した拡大植林計画によって水川の山にもスギ・ヒノキの人工植林地が劇的に増え、現在の水川の景観を作っていった。家庭や農作業で使う燃料が薪や枯れ葉などから、ガスや電気や重油へと変わっていく燃料革命により、雑木林は姿を消していく運命にあったが、この頃からさらに消滅のスピードが速くなっていった。戦争中に木材を消費した分を取り戻そうとしたことと、戦後の雇用創出のひとつとして躍起になって植林を推し進めたため、スギ・ヒノキだらけの林で日本の山が覆われていった。林業にかつてのような産業としての生産性がなくなった今日、一般的な水川の農家の多くが茶業と林業の二本柱による兼業はやめて、茶業と何らかの一次産業以外の職業(サラリーマンや役場の職員など)を家族で分担して兼業している。島田市など近隣の街に働きに出る人も多い。いわゆる今風の兼業農家である。そのような状況のなかで、かつての林業地は、ほとんど生産性が見込みがないためか、減多に出材などはせずに整地や木枝の管理だけをするか、もしくはそれすらしないで荒れ放題の放置林にされるかのどちらかであることが多い。現在水川も含め全国的に見られる林業地に生えている木は多くが戦後の植林拡大政策時代に植えられた木か、それが伐採された跡に再植林された木であり、特に前者の木はすでに 50～60 年生となっているので、ちょうど今が伐採適齢期である。しかし 1960 年代に海外から低価格の木材を自由に輸入できるようになった頃から、国内産木材が価格競争に負けるようになり、次第に日本の山林から活気が失われていくことになる。水川において、林業地から実際に木を伐り出し市場に持ち込むことによる収入が得ることが出来たのは今から 20～30 年くらい前までである。それ以降は今に至るまで伐採から出材までにかかるコストと市場での木材価格がちょうど同じような金額で推移し、ほぼプラスマイナス 0 状態が続いているか、赤字になるかのどちらかなので、今では林業地を所有している人は減多に木を伐らない。

林業は後継者不足の問題も抱えている。戦後のまだ林業が盛んだった頃から林業を支えてきた世代が高齢化している現在、本来ならば若い世代の人に受け継がせて継続していくべきところなのだが、既に停滞状況が長く続いている林業に積極的に携わろうとする若者は水川でもほとんどいない。これは既に上の世代の人々が林業に積極的になれない状況を考えると、ある意味自然なことなのかも知れない。また、Tさんは、年をとり自分で山に入って作業が出来なくなった時には、林業の後継ぎもいないので森林組合に林の管理を託すこともあるかもしれないと述べていた。

Tさんが今の林業に対して思われることは、やはり昔ながらの雑木林がある山作りをした方が良いのではないかな。雑木とスギ・ヒノキのバランスが取れた、景観としても季節感がある綺麗な山が戻れば良いなあ、ということだった。

### 3.2 生業としての林業 2

Sさん(80歳代 男性)とNさん(70歳代 男性)の2人は前述のTさんと同じく山を持つお茶農家の方である。またNさんは住宅建築にも携わっていらっしゃる方である。SさんとNさんは水川での林業について以下のように語った。

2人の家は昔から茶農家をしているが、山も持っていて、木材価格が大きく下落し始めるより以前は、林業も今より真面目にやっていた。かつては木材・シイタケ・薪をとる場所として、現在よりも森林が生活の身近なところに入り込んでいた。川根地域における林業が大きくその様子を変化させ始めたのは、高度経済成長期の頃で、東名高速道路や新幹線などを含めあらゆる交通網、道路状況が発達し始めたことが林業にも大きく影響していくことになった。また昭和30年代から大井川水系での電力開発が本格的に始まり、水川での生活も大きく変わっていった。

水川において林業が停滞に差し掛かった理由のひとつは、やはり外国から安い木材が入ってきたことと、もうひとつ、国内の他の林産地の木材と川根の木材が同じ市場で競わなければならないようになったことが挙げられる。これは前述の高度経済成長期以降の日本全土規模での交通網の発達が関係している。交通の発達はすなわち輸送の発達でもある。これまで集中的に川根の木材が消費されていた地域の市場に、四国や紀伊山地などいわゆる「林業の本場」で出材された木材が参入するようになり、またそこに1960年代の木材自由化により外国産木材も加わったため、水川を含めた川根地域産の木材が相対的に市場での力を徐々に弱めていったのである。特に外国産木材はコスト面で大変優れているため、かつては熱帯林産の木材が、近年では北米やロシアなどの木材が、川根材だけでなく国内産の木材全般に対して優位性を保っている。

木材は、山地主・伐採する人・木材を運搬する人・木材から材木へ加工する人といったように、プロセスごとにたくさんの人が関わって生産されている。ロシアの木材に関して言えば、先ず人件費が日本に比べ1/10近くまで低く、低コストでの管理・出材が可能である。ロシアはシベリアが極寒の地であるため、木の成長が遅く年輪が詰まっていて品質が良い。また木の内部に水分が少なく、冬の間水分凍結によるひび割れが起きにくいマツ材が多いが、マツは性質上丈夫なので建材としてもスギなどに比べ比較的上質であるという。消費者は安い木材を求めるため、このように低コストで品質のよい外国産木材がもてはやされる様になった。

これらの要因によって、水川において林業で生活が成り立っていたのは昭和40～50年代までである。木材が伐り出されるまでにはたくさんの人が関わっていると書いたが、林業が下火になるとそれまで個人で枝打ち・間伐・伐採・搬出などを請け負っていた技術のある人が林業から離れてしまい、技術の流出・低下・人手不足といった問題も起きた。

林作業の機械化は1970年代頃から進み、正確な年号は思い出せないが、水川では大体30年くらい前に伐採用の大鋸に替わりチェーンソーが、それよりも少し後になって下刈り用の鎌に替わり草刈機が導入されたという。また、昔は人の手で運んでいた木材をワイヤ

一で吊って移動させる架線集材機も使われるようになった。機械のなかにはパワーショベルを改造したような重機タイプの物があるが、これらは大型で本体価格や維持費が大変高いので、水川では個人での所有は無理である。これらの重機は使用すれば便利で作業効率も上がるが、川根では森林組合が所有しているため、一般の林業家が自分の林に重機を入れたい場合レンタル料金を組合に支払わなければならない。また重機を移動させるためにどうしても林道などが必要のため、林道の敷設費用も念頭に入れて導入を検討しなければならない。

N さんによると、現在は家の建材にも新しい素材が取り入れられているので、家を建てるときに使用する木材の量自体が減ってきているという。林業不振の原因は多元的なものであることを窺わせるエピソードのひとつである。

現在 S さんや N さん世代の人々がどのように生活しているかという、林業は現在ではまったくといって良いほど収入源にはならず、茶業に関しても近年茶葉の価格が下がっている一方、農薬や機械化などで生産コストは上がっているため以前より景気が悪いので、年金などを合わせて上手く生活しているということだった。

林業の採算が取れずにみんなが困っている現状について、N さんは国や県から補助金が出されるのは良いが、林業の根本的な体質改善にはなっていないので、木材の市場価格を是正するための新しい外国産木材対策をうちだすとか、国産材の消費を少しでも増やすなどの努力をしなければならないと語ってくれた。



写真4 人工林



写真5 雑木林

### 3.3 林業と深く関わる職業から

伐採された木を加工する工場を製材所という。ある製材所を経営する女性である O さんは、木を育てるのではなく、加工する立場の視点で水川の林業について以下のように語った。

製材所は家族 3 人と従業員 1 人で経営していて、地元の工務店や個人で材木が必要な人々を対象に丸太からあらゆる切り方で木を切り出して販売している。具体的な商品は建材・土木作業用の用材・木材チップ(東海パルプ向け)・おがくず(おが粉屋向け)などである。顧

客の中には自分の所有している山林の木材を使用して自分の家を建てる人もいるという。扱う木材の種類は、現在は林業地のほとんどがスギ・ヒノキで占められているためかスギ・ヒノキが多く、ケヤキなどは少ないという。また、雑木林が今より多かった頃はモミ・マツなども扱っていたという。ちなみにマツはロシア産木材の件でも記した通り材質が丈夫であるのだが、曲がって生えてしまうことが多いため、長く材を取ることが出来ないという欠点があった。最近ではマツの代わりに太いスギを使うか、マツ材にこだわるなら北米産のマツも使うようになってきているようだ。木材は基本的に地元川根のものを使うようにしていて、たまに静岡県森林組合連合会などから天竜材と呼ばれる天竜川水系で採れた木材を持ってこることもあるという。他の地域の木材にも優れたところがたくさんあるのは事実だが、川根の木材も、特にヒノキ材などはブランド化できる実力は十分あると、Oさんは考えているようだ。川根材について詳しく言うと、川根では林業地によって枝打ちの有無などに差があるので、山の所有者の手間の掛け方の差がそのまま木材の質に出るといえる。山の所有者は全員が川根本町内に住んでいるわけではなく、島田や藤枝など下流域に住んでいるため十分に山に来られない人もいるという。

製材所の経営はバブル崩壊と共に取引先の工務店などが「暇」になったため、それと連動して低迷した。また生活用品を作る材料が木材からプラスチックへ取って代わったり、昔は間伐材を利用して工事現場の足場が鉄パイプで組まれるようになっていたり、梱包が木箱からダンボール箱に変化するなどして、木材の需要そのものも低下している。最近では木材の良さが見直され、冷蔵庫や自動車の生産で使用する型枠や箱などが木製に戻りつつあるというが、依然として状況は厳しいようだ。

最近の川根材は個人の農林業者からも預かるが、専らFSCの関係で伐採された木材を加工することが多いということだった。FSCとは、環境・景観・動物にとって良い森作り、健全な森を育てることを目的とした世界的な森林認証制度のことで、静岡県の森林はこの森林認証制度に日本で初めて認証された。製材所としてはこのFSCの木材で是非家を建ててみたいとのことだったが、今のところはコースターやちょっとした木箱などを製作しているに過ぎない。

Oさんは今の川根の林業には希望が少ない気がするとおっしゃっていた。後継者問題や木材価格の下落など不安要素はたくさん見つかるが、Oさん曰く、すべての人がそうとは限らないが、今の林業家にはやる気が感じられず、よって様々な面において進歩がみられない状況が続いているように感じられるとのことだった。

Oさんは「白羽山はばたきの森に集う会」という事業を主催していて、小規模ながら木材となる木を育成しているという。これはもともと静岡県の植林事業だったものを、県の管理期限が切れたために受け継ぐ形で設立された。この活動ではいろんな地域から集まった日ごろ林業とは縁遠い人々が、水川の白羽山で実際に木を植えるなど実地で作業をしてもらうことによって、定期的に訪れて少しずつ育林していき、林業と森について理解を深めてもらうことを目的としている。参加者は島田市・藤枝市・静岡市など近隣の都市から、

東京など遠く首都圏まで想像以上に様々な地域の人々が参加している。また年に 1~2 回地元の小学生や中学生が下刈りや枝打ちをするという。草の根レベルでの林業復興への取り組みが水川の森林でも行われている。

### 3.4 森林組合おおいがわ中川根支所にて

森林組合おおいがわ中川根支所でお話を伺った男性職員の H さんは、林業家の山を預かる立場から、水川の林業を語ってくださった。

おおいがわ森林組合は、大井川流域・島田市・藤枝市の二市一町を管轄下に置いている。旧中川根地域を担当している中川根支所の現在の従業員は、事務方が 20 人ほど、山で作業をする現場労務の人が 60 人ほどいる。事務方も現場労務員の人数も、時代の流れのためか以前よりも減ってきているという。現場労務員の中には、茶業が忙しい時期以外のみに参加する臨時職員のような人もいて、常時フルメンバーでの営業をしているわけではないとのことだった。作業人員が足りない場合は下流域の藤枝から手伝いに来ることもあるという。

森林組合の仕事のひとつは組合員となった林家の林業地を預かり、土地の整備や木の育成管理や素材生産を行うことである。林業の後継者が育たない現状に少しでもてこ入れを図るため、林業の後継者育成研修も行われている。林業家の人は、組合の管理地域内に土地があれば組合に加入でき、加入の際の入会料金はその人の所有している土地の広さによって変わるそうだ。森林組合に加入すると、木の苗を一般よりも安く購入することや、森林組合に自分の林業地の管理などを委託することができる。組合員の数は材価の低迷や後継者の問題などの理由でどちらかというところ減少傾向にある。

前述のように林業は慢性的な停滞感を抜け出せないでいるのだが、その中で当然問題になってくるのが現在林業地を管理している林業家に次の世代がいるのかどうかである。林業家の間でうまく世代交代が行われなかった場合、自分の土地の境界線・作業に関する技術・知識などが継承されず大変困ったことになる。特に森林管理を仕事にする森林組合にとって悩みの種なのが、土地の境界線が分からなくなることである。日本の私有林は驚くほど細かく土地が住み分けされていることが多く、通常でも境界線をはっきり把握して作業するのに神経を使うものである。そして親から土地を受け継いだ際に境界線について詳しく知らされなかったために、お隣さんとの境界線が分からなくなってしまうことがあり、その場合判別作業は困難を極める。境界線が分からない林は結局放置林になったりするということだ。このまま森林に空白地帯が出来て穴だらけの林業地になるのは是非避けたいので、林業家の方々には責任を持って自分の山を管理してもらいたいと H さんはおっしゃっていた。

## おわりに

日本の林業について調べてみると、ひとつだけ確信できることがある。それは現在の林業が産業として停滞していて、かつ先行きが見通せないということだ。それは文献を読めば分かるし、川根本町の水川や天竜川流域で林業をされている方々に実際に話を聞いても、文献を裏付けるような話が聞ける。水川で林業に携わっている人たちに共通している認識は、林業がどん詰まりであること。そして山林所有者、製材所経営者、森林組合職員などそれぞれの立場からの言い分を聞くことができた。山林所有者の方々は、木材価格の安さを嘆くのと同時に、行政側に対しては今の補助金などの対策だけではなく、市場そのものを変えていくような対策を打ち出して欲しいとおっしゃっていた。今の補助金は確かに助けにはなるが、現状維持のために消費するだけで進展性はないという。また製材をしている立場の人は一部の山林所有者に対して、もっと自助努力をしてみてもどうだろうかとか多少手厳しい答えも返ってきた。しかしこれは林業と林業家の今について真摯に考えての結果の厳しさであろう。森林組合の方は仕事をしていて困ることは土地の境界線が分からなくなるのだとおっしゃっていたが、これは天竜川流域の森林組合の方も同様のことを話してくれたことから、他人から預かる土地での作業の大変さと、土地の境界線が分からなくなるほどまでに山林所有者の関心が林業から離れていることの証拠であるのだと理解することができた。そして、それぞれの視点からの意見を組み合わせ描き出される水川の林業の姿は、日本全体で林業に携わっている人々の相互関係の縮図であり、林業における水川での課題は日本の課題なのではないだろうか。

ところで林業家の方々には、負の連鎖に陥っている林業に携わり、先行きが見えず将来が暗いと語りつつも自分の土地の森林はきちんと管理されている方がいらっしやっし、今では少なくなった雑木林をスギ・ヒノキに植え替えずに大切に守っている方もいらっしやっし。何故その人たちは他の林業家のように、生産性の低い林業地を完全に放棄してしまわないのだろうか。私は今回それを直接聞くことができなかつたが、話を伺う中でニュアンスとして感じ取れたことがあった。それはやはりお金にはならなくても、自分の先祖から受け継いだ大切な林であり、木であると言うこと。土壌保護・水源涵養・生態系を育む場など、公益機能を果たすために林をしっかり管理・整備しておこうという責任感。そういったものを感じることができた。

今、山間地へ行ってぐると山肌を見渡すと、きちんと間伐がされていて綺麗に整った土地と、ほったらかしにされているのがよく分る荒れた土地がパッチワークのように入り混じっていて、時々雑木林が点在している光景を見ることができる。その景観からも山林所有者が皆同じように森林に接しているわけではないことが分かる。林業家の方と話して私が思ったのは、細かく山を分け合っている土地所有者は、その生活様式も山に対する意識・関心もばらばらであるということである。そしてそれが現在の林業の混沌とした雰囲気を表しているとも。山林を所有している人たちが皆林業に取り組みたくなるような、そんな環境に林業全体を塗り替えなければ、この産業の停滞はまだ当分続くに違いないだろう。

## 謝辞

今回のフィールドワークは強烈な不安と緊張に包まれた状態でスタートを切りました。インタビューにご協力いただいた水川の方々が親切に応じて下さったおかげで、私が最初に想像していたよりもずっと順調にフィールドワークを行うことが出来たと思っています。二番茶の季節、お忙しい時期にインタビューに応じてくださり、そのほか様々なお世話になった水川・尾呂久保の方々、宿泊施設ウッドハウスおろくぼのスタッフの方々、ご指導いただいた先生の方々、文化人類学コースの皆にとっても感謝しています。本当にありがとうございました。

## 参考文献

榛村純一

1979『山とむらの思想 一山村振興・林業経営の明日を探る一』清文社

田嶋謙三

2000『森林の復活 一林業の立場から一』朝日選書

中川根町史編さん委員会(編)

2006『中川根町史 近現代通史編』

農林水産省

2005『第164回国会(常会)提出 「平成17年度 森林及び林業の動向 平成18年度 森林及び林業施策」 』

## 参考HP

白羽山はばたきの森に集う会HP

<http://habatakinomori.yamanoha.com/index.html> (2009/11/10 現在)